

いにしへの映画つれづれ② 映画パンフレット漂流記(1)

千葉豹一郎

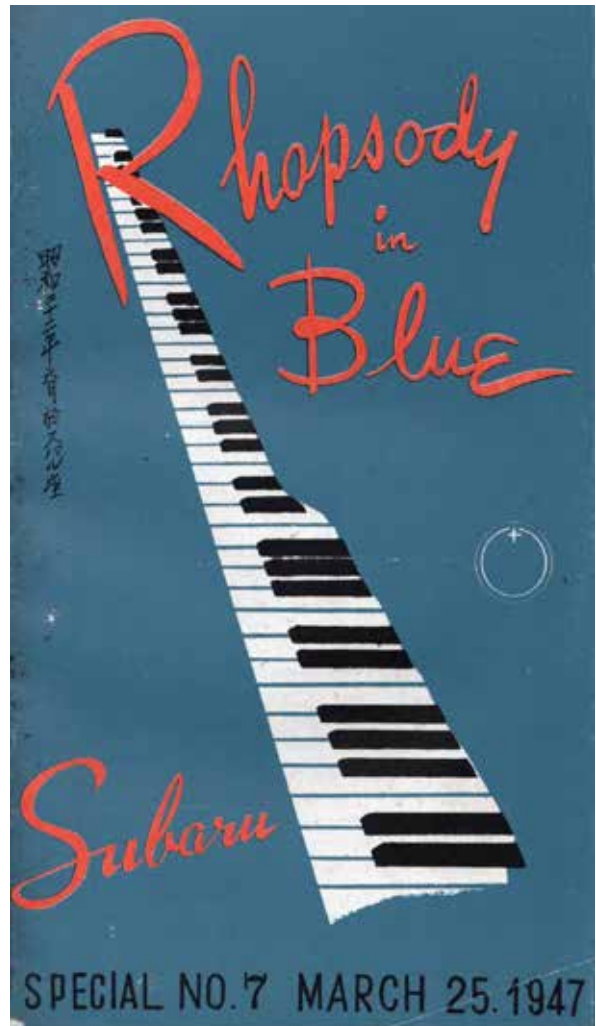
本欄で毎号掲載している映画パンフレットについて、いろいろとお問い合わせがある。どうやって入手したのか？どこで入手できるのか？私物なのか？売ってくれ！などだ。映画の本や記事では、未見の読者に対象となる映画を出来るだけ具体的にイメージしていただくために、パンフレットやスチール写真などのヴィジュアルが欠かせない。いい機会でもあり、お問い合わせにお答えしながら、これらや周辺、とくにその時代の空気などについてのもろもろを記したいと思う。映画パンフレット（以下 パンプ）は日本特有なもので、一部の大作などを除き原則として諸外国にはないようである。戦前の日本

では、劇場ごとに次回の予告も兼ねた冊子を作って無料で配布していた。そのため、広告などにスペースを取られて現在のものに比べて映画に関する記述は少なかったが、内容は充実し自由闊達だった。しかし、昭和10年代に入って日中戦争以降は次第に当局への忖度や圧力などで自由度が失われ、戦況の悪化で紙質も悪くなり自然消滅していったという。現在のような有料のパンフは戦後間もなくの昭和22年からで、初のロードショウ劇場とされる旧スバル座の「アメリカ交響楽」(45)が最初といわれる。一説では戦後の紙不足でタダで配るゆとりがなくなったための、苦肉の策らしい。しかし、スバル座の

こけら落とし作品は昭和21年暮れの「わが心の歌」(42)で、パンフとも冊子ともつかない二つ折りの館名入りのものを持っている(酸化寸前だが 笑)。同作の2番館のものは、昭和20年代中頃までよく見られたに三つ折りのもので、いずれも広告が多く、無料だったのか有料だったのかは判然としない。スバル座がロードショウ館となったのは、上記のように昭和22年の7作目の「アメリカ交響楽」からで、パンフは初のロードショウ館という格式を意識してか、ページ数も多くSubaruと館名の入った変形の縦長で豪華な雰囲気を漂わせていた。特価15円との表記もあり、このあたりが有料の始まり



大正15年発行の武蔵野館の冊子。なかなか味のあるモダンな表紙だ。



初のロードショウとしてスバル座で公開された
ジョージ・ガーシュインの伝記「アメリカ交響楽」(45)のパンフ。

映画パンフレット漂流記(1)

だったのは間違いないようだ。戦争で娯楽に飢えていた人々が映画館に殺到したためどこも満員御礼で、あまりの混雑ぶりにうれしい悲鳴とばかり言っていられないような状況だったそうだ。とくに戦争で輸入が途絶えていた洋画の人気はすさまじく、後世に残る名画も含めて旧作も続々公開された。落ち着いて観たいという向きには指定席もあるロードショー館はありがたく、いち早く～館ではなく映画劇場と名乗った戦前からある日比谷映画劇場でも前後して館名入りのパンフを販売するようになった。こちらは小型版と呼ばれるB5の大きさで、昭和30年代くらいまではこの版が主流だった。ただ、印刷も紙質も大変悪く、前述の通り戦後間もなくのものは酸化して、保存状態によっては風化寸前のものも少なくない。これらをめくると年々紙質がましになっていって、こんなところからも戦後の復興の足跡がうかがえる。洋画の多くでパンフが制作されていたのに

対し、邦画では週替わりの2本立て興行が一般的だったために時間的余裕もなく、一部の作品に止まり併映作品と一緒にのことが多かった。

初めて劇場でパンフを買ったのは、たしか東宝の「キングコング対ゴジラ」(62)だった。この頃はテレビが主流になりつつあって、自分もテレビと共に育ってきたいわゆるテレビっ子世代である。ただ、映画はまだステータスがあって、三船敏郎、石原裕次郎、市川雷蔵といった映画スターが健在で、CMなどで見ることはあってもテレビには出ないということで映画館でしか出演作を観ることはできなかった。そんな時代だから、金を払って映画館へ行くことは特別でよそ行きのイメージがあった。

ましてや、子供だったから一人で出かけて行くわけにもいかず、家族で定期的に映画館に行く習慣のなかったわが家では、劇場へ行くのは夏休みなどに怪獣映画がかかると

きだけで大人同伴だった。地元の数館あった2番館へ行くこともあったが、いずれも風紀が悪く、まったくやる気もなかったので、パンフを置いていることはほとんどなかった。「キングコング～」のパンフを買ったのもたしか有楽町の東宝直営館だったと思う。綺麗なカラー印刷で怪獣の写真やいろいろな解説も載っていて、何とも楽しいものだった。それからは映画を観に行き行って売ってれば、必ずパンフを買うようになった(正確には親などに買ってもらったのだが)。これらのほとんどは怪獣映画のもので、まだ熱心に集めていたわけではなく、家人に捨てられたのかいつの間にかなくなってしまった。本格的にパンフを集めるようになったのは、中学に入って一人で映画を観に行くようになってからだ。

その第1弾は、昨年亡くなったアラン・ドロン主演の「サムライ」(67)である。子供の頃から、「アンタッチャブル」や「サンセット



「映画友の会」でゲットした「皇帝のビーナス」。



「電送人間」(60)のパンフ。併映の「爆笑嬢はん日記」も収められている。

映画パンフレット漂流記(1)

77]など当時全盛期の外画ドラマに親しみ、毎日放映されていたフジテレビの「テレビ名画座」などの洋画もよく観ていた。これらは吹き替えだったので、ながらも気楽に観られた。一方、洋画は子供向きの映画以外はほぼ字幕で読むのが煩わしく、本当に観たかった「マシンガン・シティ」(67)や「2001年宇宙の旅」(67)などを除いて敬遠していた。もっとも、題名につられて普通のSF映画と思った「2001～」は難解で、当時はテーマもよく理解できず期待外れだった。

「サムライ」はやはり題名に触発されたのと、テレビのスポットで知っておもしろそうだったので、日比谷映画へ観に行った。ドロンには“金を持ってドロンする”などの言い回しから、滑稽なイメージを持っていた。だが、二枚目として人気が高くよくその名を耳にした。例によってカッコつけ過ぎてはいたが、ソフトと帽にトレンチコートがよく似合い映画もムードがあってすごくおもしろ

かった。100円で買ったこのパンフが、後に高値を呼ぶなどとは思もしなかった。この後、松竹セントラルの「猿の惑星」(68)渋谷パンテオンの「俺たちに明日はない」(68)と続き、前者では猿そっくりな主役のチャールトン・ヘストンだけが人間なのが可笑しく、後者はあまり後味がよくなかった。その頃、英語を習うことになった親戚同様の大学生Kさんが大変な映画愛好家だったことから、一気に映画への眼を開かれることになる。年に百本以上も観るほどで、映画そのものはもちろん、俳優の人生や私生活などにもすごく詳しくあった。パンフも大量に持っていて、自宅に遊びに行った折はむさぼるようにページをめくった。おかげで短期間に映画の知識がかなり身に付き、有能な先生に教わるとこんなにも違うものか、と学校や教師の存在意義というものを身をもって実感した。テレビでも洋画劇場が盛んになり、映画雑誌「スクリーン」に出ている「日曜洋画劇場」の解説者の

淀川長治先生が主催する「映画友の会」へも出かけてみた。数十人ほどいた会員は大学生や社会人らしき人ばかり。高校生はおろか自分のような中学生は皆無で、「何だ、お前？」という空気がありありで、視線が一齐に注がれた。会は毎月第3土曜の2時から5時までで、先生の登場は3時から。最初の1時間は会員同士の告知や歓談などで、大学生くらいのお兄さんがイタリアの美人女優ジーナ・ロロブリジーダ主演の「皇帝のビーナス」(62)のパンフをわざと、「欲しい方に差し上げます」と言った。未見だったが即座に「はい！」と挙手すると失笑がもれたが、「スカラ座」と館名が入った1冊ゲットすることができた。翌月くらいからは今も付き合いのある大学生の1人と仲良くなり、淀川先生には本当にいろいろなことを教えて頂いた。突飛な質問にもいつも真摯に答えて下さった。しかし、先生は評論家というよりすでに有名人で半ばタレントのような存在。それに、会では試写会などのタダ券を一切配布しないことを毎回宣言していたから、何となく古いパンフの入手方法については聞きづらかった。それを教えて下さったのはその後知己を得た児玉数夫先生だった。児玉先生も「スクリーン」の執筆者の一人だったが、淀川先生と違って重箱の隅をつつくような細かな話題を好み、かなりマニアックで業界では“調べ魔”と呼ばれて淀川先生とは風合いが異なっていた。淀川先生が主役級だとすれば、児玉先生は玄人受けする地味で堅実な脇役というところだろうか。自宅にお邪魔して夕食までご馳走になったこともあり、洋書も含めた貴重な資料も惜しみなく見せて下さった。児玉先生に教えて頂いたのは、神保町の交差点付近の「良古堂」という小さな古書店だった。店名こそ違っていたが、見たこともないような古びた小型版のパンフが腰くらいの高さまで、ほこりを被って無造作に積んであった。しかも、一冊10円！均一ときて、夢中であさった。いわゆる有名作はほとんどなく、未見の映画ばかりだったが、物珍しさといずれ観ることもあるだろうと、百冊ほど買った。予算的にも持ち帰るのにも、これが限界だった。捲土重来を期して次に行ったときには、店ごとなくなっていた。知らなかっただけかもしれないが、当時は地元も含め、時折行く古書店で旧作のパンフを売っているところは他にはなかった。しかし、比較的新しい映画のパンフなら、日比谷映画の裏手で入手することが出来た。正確にはゲームセンターに通じる通路の入り口付近である。ゲームセンターを右



アラン・ドロン絶頂期の「サムライ」(67)のパンフ。

場」の解説者の淀川長治先生が主催する「映画友の会」へも出かけてみた。数十人ほどいた会員は大学生や社会人らしき人ばかり。高校生はおろか自分のような中学生は皆無で、「何だ、お前？」という空気がありありで、視線が一齐に注がれた。会は毎月第3土曜の2時から5時までで、先生の登場は3時から。最初の1時間は会員同士の告知や歓談などで、大学生くらいのお兄さんがイタリアの美人女優ジーナ・ロロブリジーダ主

映画パンフレット漂流記(1)

に見ながらずっと奥に進んだ2階には、空気銃の射撃所もあった。何と実銃で、当時の銃刀法では合法だったようだ。殺傷能力があるだけにポンプで送り込む空気は2回までとされ、銃は的を狙うのに最低限必要な短い鎖で台座に固定されていた。料金はたしか30発300円だった。あまり大っぴらに案内はされてはいないのにもいつも結構込んでいて、知る人ぞ知る穴場だったようだ。そのためか、30分の時間制で一人1回の制限があった。数回ほど行ってそこそこの命中率だったが、ポンプを操作するため時間的にはギリギリで、集中力を要するので結構疲れた。ここもいつの間になくなり、新宿のミラノ座と同じビル内にあった系列の射撃場も閉館前に姿を消した。日比谷の一等地の正面から見れば威風堂々とした日比谷映画の裏手は、こんな風にちょっとしたカオスだったのだ。パンプを売っていた店は、都会的な社風の東宝らしく「東宝ファンタジー・コーナー」と洒落た名を冠し、年配の夫婦が切り盛りしていた。しかし、実態はファンタジーとはほど遠い露天に近く、他にもちょっとしたアクセサリなども売っていた。

初めて行ったときに急に雨が降り出すと、おじさんが300円で売っていた傘の値段の3を8にして呼び込みをしたのには驚き呆れてしまった。この時代は結構あちこちでこういうことが時折見られ、話に聞く戦争直後の闇市の一端をかいま見た気がしたものだ。年齢的におじさんもかつては闇屋だったか、少なくとも手伝いくらいはした経験があったのだろう。即座に傘の値段を書き換えた手際のよさから、そう思った。もっとも、パンプは劇場と同じ100円

かせいぜい150円位だった。余ったいわゆる新古品だったらしく、1作品で複数冊売っているものがほとんどだった。2番館のものしか持っていなかった「刑事マディガン」(68)とシナトラの「刑事」(68)の封切り時のパンプを買った。ポスターも売っていて、「マディガン」と「心の旅路」(42)のリバイバル時ものを買った。しかし、ポスターはかさばるうえに保管も大変で、すぐに見切りをつけて以後はほとんど買わなくなった。それから、有楽町界隈で映画を観た帰りなどに時折寄り、買い損ねた映画のパンプを買った。いつの間にかおじさんを見かけなくなり、おばさんに聞くと、脳梗塞で倒れ復帰は難しいらしく。しばらくはおばさん一人で店を回していたが、ほどなくおじさんとお兄さんの間くらいの30過ぎの若い男が手伝うようになった。名前はOといい、つい先日まで「コロンビア映画」にいたということだった。それだけに映画にもそこそこ詳しく、接客も上手かったので、次第に店を任されて番頭のような存在になって旧作のパンプも販売し始めた。そうだった経緯は不

になって新古品との比率が逆転し、コレクターらしき連中がたむろするようになった。

その中で、よく顔を合わせる年代の近い数人と自然と近しくなり、パンプのことなどを中心にいろいろと情報交換するようになった。自分などはパンプはあくまで映画の延長線上にある資料、あるいは記念となるいわば副産物と位置づけていた。ところが、彼らの多くは映画そのものより、パンプの方が主体だった。珍しいからとか、どこぞの劇場の最初のもだから、高く売れそうだからということで、肝心の映画そのものは未見でも、目当てのものがあると即座に買い求めていた。中には、特定の劇場のパンプを最初から順番に集めていた人もいた。そんな調子だから一様に事情に詳しく、○△はどここの劇場で封切られたかなどもよく知っていた。

中古パンプの市場価格にも精通して、アラン・ドロンの「冒険者たち」(67)は1万円! 「サムライ」は4千円だという。手持ちのプログラムの価格高騰は、不動産と違って固定資産税が上がるわけではないから悪い気はしなかったが、投機の対象にしているわけではない。複数冊持っていたらともかく、せつかくの資料を手放しては本末転倒だ。実際、中古パンプを扱うようになってからの価格の上昇は、頭痛の種だった。(次号に続く)。



昭和30年代の 備忘録

僕と日本の少年時代
for iPhone

千葉豹一郎



あの日、未来は明るかった。慌ただしくもほっこりと、現代人の郷愁を誘う「昭和30年代のマスカルチャー」

ケーシー先生や力山に憧れ、アトムや鉄人に熱中し、カラーテレビが、クーラーが、ハンバーガーショップが身近に押し寄せてきた夢いっぱい少年時代。一方で、周りを見回せば捨てられたガム、連続する鉄道大事故、暴走タクシー。牛の給餌の豚肉100%コンビーフや怪しい漬けないアイスも売られ、食の安全はそっちのけ状態。"古き良き昭和"ばかりではない、リアルな日本の高度成長期を描いた軽快なエッセー。




付録ムービー	食	26. 輝くマテル
テレビ・芸能	13. モナカカレーと「少年ジェット」	27. 果かった金銭取引のモテルガン
1. テレビの青春時代	14. アメリカンドッグ車始め+レモネード	28. プラモデル絵中時代
2. 教科書だったアメリカのドラマ	15. ハンバーガー開拓史	社会・文化
3. アトムの力山	16. アトムの怪盗船	29. ケネディの時代
4. 実写版「鉄腕アトム」と「鉄人28号」	17. 謎のフトミン	30. 外車運送
5. コマソンの女王 糖トシエ	18. 駄菓子屋とお菓子屋のあったころ	31. 国産車は難物か?
家電	19. 前未ジュース盛衰記	32. サンドイッチのような車の三角窓
6. 電気屋の裏事情	20. 傑作! 噴水型ジュース自動機	33. デパートはワンダーランド!
7. カラーテレビ狂熱	21. 10円アイスクリームが花盛り	34. 町の映画館
8. リモコンテレビが欲しい!	22. 漬けたガムがついて	35. 折れたお式式コップ
9. クーラーをつけたまま寝ると死ぬ?	ホビー	36. 月刊マンガ誌と付録
10. ボロロイカメラ	23. 鉄の手裏剣	37. ベラベラのソングシート
11. 可愛いフジベタカメラ	24. 2B弾とクックカー	
12. 8ミリフィルム	25. 銀玉鉄物の王道	

当書DVD版は、月刊FDI編集部にて
 本文：108ページ/映像：2分23秒 2012年9月ミリアムワード(株)発行
 価格：1,980円(税込)
 株式会社ユニワールド 東京都世田谷区上北沢3-17-5 杉本ビル1F

著者紹介

千葉豹一郎

作家・評論家。著書に「法律社会の歩き方」(丸善)「スクリーンを横切った猫たち」(ワイズ出版)(電子版はアドレナライズ)「昭和30年代の備忘録(電子版)」(ユニワールド)「猫と映画人(電子版)」(アドレナライズ)等の他、「東京新聞」「ミステリマガジン」(早川書房)「猫生活」(緑書房)等をはじめ連載も多数。独特の切り口で草創期からの外画ドラマの研究や紹介にも力を入れている。

明だが、次第にこちらの方に力を入れるよう